

どう思いますか

生き物どこ行った

カエルの歌が聞こえてこない 9月12日 要旨

無職 松浦 恵子

(広島県 78)

この夏、田舎でも、山でも、暑かった。セミやカエルが元気に鳴くのを聞けば気持ちがいいけど、和らぐと思っただ、これまでうるさいほどだったカエルの鳴き声が聞こえてこなかった。私の住んでいるのは農村地帯だ。それでも新築の住宅が増え、放置された農地もある。

それにしてもカエルの鳴き声が聞こえない夏とは一体何なのだろう。気味が悪くなってきた。毎晩カエルの姿や鳴き声を求めて歩き、田をのぞき続けているが、ジャンボタニシのほかに生き物の姿をほとんど見かけない。私の住む地域だけの問題か。環境の汚染や変化によるものなのか。カエルの歌が聞こえてこない「沈黙の田んぼ」はご免被りたい。

小さな命の危機は人類の危機

無職 浜田 謙一

(山形県 72)

「沈黙の田んぼ」、私も気になっていました。12年前、米どころと言われる庄内地方に移住しました。美しい田んぼが広がっていたのですが、あまりに静かで、水面が動かないのです。子ども時代の遊び場でもあった田んぼには、ア

メンボやミズスマシが水面に波を立て、カエルの声で水の輪が伝わり、居場所がわかるほどでした。畔を歩けばカエルやバッタが跳ねるのです。でも今の美しすぎる田んぼにはその全てがありません。夫婦で朝夕散歩する防風林の松林も、野鳥やリスが生息し生物相が豊かに思えるのですが、なぜか

テントウムシやミツバチなど、かつて当たり前だった昆虫が見つかりません。アカシアやシナノキの花に集まるハチの歌も聞こえてこないのです。私たちは、外来の目新しい生き物にはすぐに気がついて、たとえミノムシのように見慣れた生き物が姿を消しても気がつかないものです。小さな生き物たちの危機は、必ず人類の危機につながると思っています。

カエルは生物多様性の象徴

農業 松澤 政満

(愛知県 74)

今年も田植えの頃の我が家の水田では、6種類のカエル(殿様、沼、土、雨、森青、シユレーゲル青)が鳴き交わし、産卵した。畔でゲンジボタルの華麗な舞を見ていると、カエルの混声のBGMが耳に痛いほど。多種多量のオタマジャ

クシが泳ぎ、お盆ごろから尾が消え小さなカエルが上陸し、種ごとの持ち場に陣取る。カエルは食欲旺盛で稲の害虫ウンカも大量繁殖できない。有機農業37年の農園には他に3種類のカエル(ヒキ、タゴ、ナガレタゴ)がいる。カエルは有機農業と持ちつ持たれつする生物多様性を象徴する生き物だ。

広島県なら、昨年来発生が多いトビロウウンカへの殺虫剤対応の影響が大きいと思う。私の住む愛知でも昨年、慣行農法の水田ではウンカ被害が多かった。有機や自然農法の田は目立った被害は無く、そこにはカエルやクモがたくさんすんでいた。農業散布は多様な調和的生物環境を壊し、農を不安定にし、情緒を失う。カエルからのメッセージを受け止めたい。

庭木減り アオマツムシ受難

無職 田崎 忠雄

(埼玉県 66)

秋になると樹上でうるさいほど鳴く虫がいる。アオマツムシという中国渡来の昆虫である。その声は近隣から聞こえなくなってきたのには樹木の環境の変化が関係しているのだろう。あまり手入れされていない街路樹が多いこともあ

るが、戸建て住宅の庭の環境の変化が大きいかもしれない。

日本もこれまで高度成長やバブルの時期を経験し、一時は金回りが良くなったことで、庭にもお金をかける人が増え、庭に樹木が多く植えられた。しかし、その後の不況と低成長の中で、庭にお金をかける人は少なくなり、相続で若

い人に世代が代われれば、庭にはできるだけお金をかけたくないと、大きくなる樹木は伐採されて減っていった。私が植木屋をしていたころ、植える木よりも伐採木の方が多いので、自嘲して「自分は切り木屋だ」と言っていたものだ。アオマツムシもすむところが減って暮らしくかろう。私の次に、アオマツムシも引退の時期を迎えているのだろうか。

受粉に欠かせぬミツバチ 共存を

地方公務員 村尾 久司

(兵庫県 54)

家庭菜園をしている義父が、イチゴができなくなったと嘆いていました。原因はミツバチの減少ではないかとのこと。イチゴの受粉はミツバチが花から花へ飛び回ってくれるおかげなのですが、ミツバチがいなくなると、人間が

手で授粉しないといけません。

ミツバチが減っている原因は何か。一因は農業の多用ではないかと聞きました。野菜やコマ栽培に有害な虫を退治し、雑草が生えるのを抑えるためにまく農薬や除草剤。これらがミツバチを減らしている可能性があるというのです。今後、温暖化による気温上昇

により害虫の増加が懸念され、農薬の使用が更に増えるという悪循環も想定されます。

ミツバチは重要な農業の働き手です。キャベツ、ニンジン、ナスのほか、メロン、リンゴもミツバチのお陰で受粉するようす。ハチを駆除できる殺虫剤も売られています。ミツバチはおとなしい性質と言われます。安易に使わず共存共栄を目指すべきだと思います。

泳ぎを教えてくれたメダカ

無職 近藤 雅晴

(福岡県 77)

70年も前の話である。私の故郷は水郷・柳川。筑後平野の水田地帯で米やイグサの生産地だ。川にはたくさん農用の掘割がつながっていた。堀には馬入れ場があり、馬が落とす物を食べに小魚やメダカが集まった。

私が泳ぎを覚えたのは小学1、2年生の頃。父が私の体に縄を巻き付けて堀に放り込んだ。必死で手足を動かし、溺れそうになると父が縄を引っ張った。一日で浮くことを覚えた。子供にとって水泳は遊びではなく、命を守る必須科目であった。速く泳ぐより長く浮

いていることが大事であった。

上級生が教えてくれたマジナイは「メダカをのみ込むと泳ぎを覚える」という土地の迷信だった。あの頃はメダカも一緒に泳いでいた。手拭いや網ですくったメダカを何十匹のみ込んだであろうか。群れをなして泳いでいたメダカも、今では絶滅危惧種。ペットショップでは数匹で千円の値が……。私のがみ込んだメダカを現在の売値に換算すると数万円にもなる。